

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol. 18 No. 1

平成 25 年 5 月 1 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

- ご挨拶
- 第 19 回総会・研究会を開催するにあたって
- 準世話人リレー連載：
弘前大学医学部附属病院緩和ケアチームの活動
- 看護部会活動紹介
- 第 27 回日本がん看護学会に参加して
- クールダウン エッセイ



ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

新たな年度が始まり、皆様の周囲にもフレッシュな新人が行き交っていることと存じます。昭和大学でも医療系学生、研修医などが集っています。新たな門出を祝いつつ、緩和ケアのキーワードである全人的痛みを理解する医療者に育てたいと願っています。

私ごとではありますが、昨年 11 月に剣道でアキレス腱を断裂し手術、入院生活を経験しました。術直後、松葉杖での歩行が不安定で転倒し、不安な夜も過ごしました。車椅子での移動も体験し、周囲の方々が差し出してくれる温かい手に、一日中、心からの「ありがとうございます」を繰り返していました。今は、松葉杖もなく、装具も取れて、歩行は可能です。普通に歩くことの喜びをかみしめています。

昨年度の事業のご報告を二つ致します。第 1 は、雑誌「緩和ケア」の 2013 年 1 月号の特集です。当会看護部会が企画した「よく遭遇する場面の看護ベシクに立ち返る」が掲載されました。総会・研究会で毎年、実施し、好評を博したワンポイントレッスンの内容です。雑誌「緩和ケア」を定期購読でない方もバックナンバーで購入して頂ければ幸いです。

第 2 に、教育部会による医学生向けのテキスト「臨床緩和ケア」第 3 版の発刊です。3 月に出たばかりです。新たな知見を盛り込んだ改訂版で、表紙の色も一度見ると忘れられないキレイな黄土色？です。学生のため、また、皆さん自身の学びのためにもご購入いた

できれば有難いです。アマゾンでも購入できます。

今年度の新たな試みとして、今年の第 18 回日本緩和医療学会学術大会において、ワークショップ「大学病院フォーラム」を企画致しました。私と斉藤世話人が座長を務め、中村世話人が、昨年、実施した「診療に関するアンケート調査」を発表します。6 月 21 日（金）の 14:00～15:45 に開催されます。時間的に、他の講演などと重なることも多いかと存じますが、是非、足を運んでください。また、医学生の緩和ケア教育を取り扱う「ワークショップ：卒前教育の確立に向かって」で、私は座長と共に、昨年、実施した全国の医学生教育のアンケート調査を発表いたします。6 月 21 日の 8:30～10:00 と朝一番ですが、一人でも多くの参加者をご参集いただければ幸いです。

第 10 回目となる医学生の緩和ケア教育のための教員セミナーは、10 月 26 日（土）、27 日（日）に昭和大学で開催します。導入部分で、私がマスターになり、ワールドカフェを開店する予定です。お会いできることを楽しみにしております。

今年の総会・研究会の主催大学は、聖マリアンナ医科大学です。西木戸世話人を中心に鋭意、準備をしております。ポスター、チラシなどの広報をサポートして頂ければ幸いです。

今年度も当会の発展のため、物心両面でのご支援を何卒よろしくお願いいたします。

第 19 回総会・研究会を開催するにあたって

聖マリアンナ医科大学病院 西木戸 修

第 19 回総会・研究会を 2013 年 9 月 7 日（土）午後に、神奈川県川崎市にあります聖マリアンナ医科大

学病院で開催することになりました。



聖マリアンナ医科大学では、1998年・第4回、2003年・第9回に続いて、3度目の開催となります。当大学での研究会のテーマは、第4回では「患者は最後の時をどこで過ごしたいのか」、第9回では「立ち上げよう！緩和ケアチーム」でしたが、今回は「**多職種で支える緩和ケア**」としました。我々も緩和ケアチームを2010年12月に立ち上げました。チーム発足時は、医師、看護師、薬剤師を中心に活動していましたが、現在は、臨床心理士、ソーシャルワーカー、作業療法士、管理栄養士、事務を加えて多職種で活動を行っています。各職種が各々の専門性を発揮して、入院患者を中心に緩和ケアを提供しています。また、それぞれの職種の立場を尊重し合うことにより、各々のスキルが向上していると感じています。

このテーマに沿って、**シンポジウム**は、「**多職種で支える緩和ケア in 聖マリアンナ医科大学**」としました。聖マリアンナ医科大学には規模・機能・役割の異なる5つの病院があります。この5つの病院からシン

ポジストを推薦して頂き、職種が重複しないように配慮をした上でシンポジストをお願いしております。今回はシンポジストの方々に各病院における緩和ケアの活動について報告して頂くとともに、緩和ケアを支える取り組みについて職種を代表して発表をして頂く予定です。本シンポジウムは「病院の規模・機能・役割を踏まえた緩和治療」と「各職種が協力して進めていく緩和治療」という2つのテーマを扱うこととなりますが、これらのテーマは本学以外の大学病院からの出席者の方にも共通した話題として受け入れていただけるのではないかと考えております。

ランチョンセミナーは昭和大学 内科学講座緩和医療科学部門樋口比登美教授に、特別講演は、がん・感染症センター都立駒込病院 緩和ケア科栗原幸江先生にお願いしております。現在、ご参加いただいた皆様にとって有意義な会になりますように準備を進めております。多くの方々のご参加のほど心よりお待ちしております。

☆準世話人リレー連載 大学病院における緩和ケアを考える☆



当院は、青森県南西部に位置する県内唯一の大学病院です。病床数は636と大学病院としては小規模ですが、地域内は病院も医療職も不足しているため、様々な意味で常に「過飽和」状態にあります。

当院における緩和ケア活動の歴史は、平成8年から行われてきた、麻酔科ペインクリニック部門のがん患者に対する「何でも屋」的な介入に端を発します。痛み治療を中心に、様々な症状緩和から患者の話し相手までを広く担うべく、当初は「緩和ケア」や「total pain」といった概念の知識もなく、がむしゃらに病院内を常にウロウロしていました。麻酔科は6つの病床を有していますので、神経ブロック・放射線治療などのインターベンションを要する場合、痛み治療目的の入院を希望される場合には、麻酔科病床を利用できます。積極的がん治療が終了となった患者が行き場を失った際の、看取りを目的とした入院も受け入れており、主治医経験の乏しい麻酔科医にとって、進行がん・末期がんの患者を主治医として支える経験を積むことは貴重です。平成19年4月に当院が地域がん診療連携拠点病院に指定されたことを機に、緩和ケア認定看護師、臨床心理士、精神科医師、薬剤師、管理栄養士

弘前大学医学部附属病院緩和ケアチームの活動 ～地方大学の弱点を強みに変える直接介入体制による緩和ケア～ 弘前大学医学部附属病院 麻酔科 緩和ケア診療室 佐藤 哲観

といった多職種のメンバー構成による正式な緩和ケアチーム（PCT）を立ち上げて、順調に（？）依頼件数を伸ばしながら現在に至っています。ここ数年の年間依頼数は300件程度で、外来での疾患早期からの介入依頼が増えています。

当院PCTの活動における最大の特徴は、全依頼患者に対する終始一貫した直接介入にあります。症状緩和に関する指示や処方、PCTが一括して行い、無休のオンコール体制で診療を行っています。主治医との間に責任や権限上の問題が生じたことはありません。直接介入体制にも利点と欠点があります。利点は何といっても患者のニーズ変化への迅速な対応で、これが患者・家族や病棟スタッフからの信頼度を高めています。欠点としては、緩和ケア丸投げにより教育効果が上がりにくいという懸念です。しかし、プロ意識のある医療職は我々の仕事を見えています。我々は現場での相談には随時応えるようにしていますので、お互いを高めあう意識を持って接することで、こちらが焦らずとも意欲ある者はちゃんと育ちます。

地方ならではの、診療科の垣根のないフレンドリーな環境により、直接介入による緩和ケアの欠点は補われ、利点が活かされています。

看護部会活動紹介 ～ナースによるナースのためのワンポイントレッスンが雑誌の特集記事になりました～

川崎市立多摩病院（指定管理者学校法人聖マリアンナ医科大学）伊藤 優子



当会の看護部会は、2007年東京大学で開催された総会研究会から始まった「ナースによるナースのためのワンポイントレッスン」の講演準備のために発足しました。講演内容をより参加者のニーズに沿った内容にするために、認定看護師を中心としたメンバーが世話人会以外でも検討することを目的として看護部会メーリングリストを作成し、メールでの情報交換で講演内容を検討していきました。総会研究会でのワンポイントレッスンはとても好評であり、開催校のニーズに合わせて看護世話人から講師を選出し、回を重ねるごとにより実践に活かせる内容に発展していきました。看護部会のメーリングリストはワンポイントレッスンの準備だけでなく、各施設での対応困難事例の相談やオピオイド管理の情報交換、緩和ケア関連の院内マニュアル整備状況など、看護世話人が他施設での情報を入手して自施設での参考にするといった事も行うようになりました。世話人看護師にとって、困ったときに頼りになる相談先として重宝しています。

この度、看護部会によるワンポイントレッスンの集大成として、青海社の雑誌「緩和ケア」第23巻第一

号（2013年1月15日発行）に特集を掲載させていただきましたので紹介いたします。「よく遭遇する場面の看護ベーシックに立ち返る」

というテーマで、ワンポイントレッスンで講義した内容を臨床に役立つヒントとなるようにブラッシュアップさせました。執筆にあたり看護部会を数回開催し、メーリングリストを活用して原稿の確認・修正を行いました。「がん疼痛に対してレスキューを正しく使う」「医療用麻薬に対する抵抗感への対応」「リンパ浮腫の発症と悪化を防ぐためのポイント」「せん妄を見逃さないためのポイント」「ここから始めよう 意思決定支援」「困難を抱える患者とのコミュニケーション」「面会に来る家族への関わりと支援」「口腔ケアの基本と口腔トラブルへの対応」という、臨床での困難場面の対応をQ&A方式でまとめています。臨床実践に活用していただき、患者家族の苦悩の緩和につながれば幸いです。今後も看護部会の活動を継続し、大学病院の緩和ケアを考える会の発展と臨床の緩和ケアの充実に貢献していきたく思います。

第27回日本がん看護学会学術集会に参加して



雪の降る美しい金沢で2月16日・17日にかけて「未来と希望を拓く温もりのあるがん看護」というテーマに、第27回日本がん看護学会が開催された。がん患者の未来と希望を温もりのある看護で切り拓いていく、というテーマに沿った充実したプログラム内容、また金沢ならではの演出も随所で感じられた学術集会でした。

中でも私が印象に残ったプログラムは、一つは田村恵子先生の教育講演「問われるがん看護実践-知と技をつなぐ力-」、二つ目は石垣靖子先生の教育講演「がん患者の意思決定を支える-情報の共有から合意へ-」でした。田村先生のご講演では、全人的ケアのゴール設定として、可能な治療と看護と患者の願いを考え、今後の予測される病態や時間などから、患者を含め検討していくことが重要であることなどが話されました。また石垣先生のご講演では、治療の選択にあたっては、医療者はエビデンスに基づいた最善の治療を患者・家族に提案するが、患者側はそれぞれ個別の事情

東京医科歯科大学医学部附属病院 本松 裕子
があり価値観もあるため、これら両者の情報を話し合っ
て合意形成に至るプロセスを共にすることが重要であり、アドボケートとしての看護師がその役割を
発揮していくことが求められると話されました。両先
生方のご講演共に、がん患者とその家族の治療やケア
の方針決定は、医学的情報だけではなくその患者・家
族らしい選択ができるように支援することが重要で
あり、それが全人的ケアのゴールとなる、そのために
看護師は患者に寄り添い、語りを聴く姿勢を持つこと
を忘れてはならない、と話されているのだと感じまし
た。学会に行くといつも感じることは、当たり前のこ
とですが心にしみる言葉で言語化して伝えてくださ
る先生がいて、そこで私は自分たちのしていることの
価値を再認識することができ、さらに磨いていかなけ
ればと身の引き締まる思いになる、ということです。
私はここ毎年10人くらいの同じ志を持つ後輩たちと
学会に行っています。今年も仲間たちと金沢のにおい
しい料理を食しながら、学会で感じたことなども含め、
楽しく明るい未来を語り合いました。この仲間たちと、

患者・家族に寄り添い、その人らしい人生を共に考えられるような看護を実践していきたいと感じました。また、その営みを通して、豊かに人生が送られるよう

〇●クールダウン〇●



難しい話ですが、ご容赦ください。

私は8年前より老人ホームで看取りをしています。心に残る良い看取りばかりでなく、残念な思いをした事、こうしたらもっと良かったのではと悔やんだことがあります、良い看取りを支える医療とはなんだろうと考えさせられます。疾患に関わらず身体的に痛み・症状が緩和され、精神的にも自分の命を見つめ受容し、愛する人々に囲まれて感謝と慈しみのなかで死を迎える。そんな看取られ方がよいと思いますが、事故・災害など様々なケースがある中で、あくまでも老人ホームでの話です。

疼痛緩和・症状緩和はしっかり行うべきことですが、患者さんがご自分の命に向き合い「死」を受容する過程でも、家族を含め患者さんを支えていくことが医療サイドに求められていると思います。高齢者の方は元気でこられた分、総じて命に限りがあるという認識がないように思えます。家族にいたっては更にその思いが強く、患者さんの状態が悪化した時にご理解を戴くことが大変難しくなっています。今よりもっと元気になりたいと思う気持ちをご自分の状態を冷静に判断することを妨げていると思い、身体を車にたとえパーツの傷み具合としてお話しするのですがうまく伝わりません。今の状態は選ばれた大変素晴らしいものなので、この状態を保って毎日を大切に過ごしましうと説明しても満足されません。クリニックを受診する

に過ごしていきたいと思います。今年もとても印象に残る、がん看護学会でした。

秦野メディカルクリニック 黒子 幸一

人は身体を心配されていらっしゃるの帰るときには笑顔になっていただくよう勤めています、命の話をするとうとうお顔が曇ります。それでも高齢者は悪化する時はスピードが速いので、お話できる時に出来るだけ「命と生きていること」についてお話をします。「どんなに生きても人生110年です、人生はその歳々でカウントダウンが始まっています、今の状態を大切に楽しく生きましょう」、励ましているつもりですがショックを受けられる方もいます。子供たちに「生と死」を話す場合の難しさとは違い、限られた時間という要素が加わるので伝え方が難しいのだと思います。ただ、漫然と接していると認知障害が進みお話が通じなくなったり、後見の問題・家族の諍いなどが生じ心が痛みます。家族には平均健康寿命を示し、健康上では患者さんの状態が優れている事をまずお話しします。そしていつまでも生きていらっしゃるわけでないことを伝えます。「昨日まで元気だったのにどうしてこんな事に」、ご家族からよく言われる言葉です。多くの方がそのように亡くなっていることを説明し、毎日のふれあいを大事にしてくださいと伝えます。すぐに納得される家族は少ないのですが、ご理解されます。

医療はそこまで介入しなくてもと悩むのですが、現代「生きて死ぬ」事を一緒に考えることが出来るのは宗教者ではなく医療者だと思います。

「看取りについてパート1」となり、クールダウンにはなりませんでした。

大学病院フォーラム in 第18回日本緩和医療学会学術大会

このフォーラムは、全国の大学病院における臨床の緩和ケア、に関する実践報告と将来に向けての問題点の共有、今後の日本の緩和ケアを推進する上でのプランを討議することを目的に開催します。当代表世話人高宮有介と企画提案者の世話人齋藤真理が座長を務め、各大学病院から問題提起をいただき、活発なディスカッションが展開されることを期待しております。

演者：中村 陽一（東邦大学医療センター大橋病院）

森 直治（藤田保健衛生大学病院）

齊藤 洋司（島根大学医学部附属病院）

佐藤 哲観（弘前大学医学部附属病院）

飯島 哲也（山梨大学医学部附属病院）

フォーラム日時 2013年6月21日（金）14：00～15：45

フォーラム会場 パシフィコ横浜 〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1

第7会場（会議センター211+212 席数：130）